

赦された。忘れられた。永久に。

2007. 9. 18 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

レビ記 16章15節から17節

「アロンは民のための罪のためのいけにえのやぎをほふり、その血を垂れ幕の内側に持ってはいり、あの雄牛の血にしたようにこの血にもして、それを『贖いのふた』の上と『贖いのふた』の前に振りかける。彼はイスラエル人の汚れと、そのそむき、すなわちそのすべての罪のために、聖所の贖いをする。彼らの汚れの中に彼らとともにある会見の天幕にも、このようにしなければならない。彼が贖いをするために聖所には行って、再び出て来るまで、だれも会見の天幕の中にはいてはならない。彼は自分と、自分の家族、それにイスラエルの全集会のために贖いをする。」

へブル人への手紙 9章11節から14節

しかしキリストは、すでに成就したすばらしい事がらの大祭司として来られ、手で造った物でない、言い替えれば、この造られた物とは違った、さらに偉大な、さらに完全な幕屋を通り、また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所にはいり、永遠の贖いを成し遂げられたのです。もし、やぎと雄牛の血、また雌牛の灰を汚れた人々に注ぎかけると、それが聖めの働きをして肉体をきよいものにするとするれば、まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とするものでしょう。

今、司会のI兄弟が言われましたように、イエス様は素晴らしいですね。私たちはイエス様の贖いのみわざを考えてみる時、イエス様を誇ることができるのではないかと思います。奥様であるM姉妹は確かに悩んだと思います。「主人を残さなくてはならないとは…」と。(笑)「子どもの面倒はだれが見るのか」等々と。けれども、姉妹はすべての心配からまた死の恐怖から、解放され天に召されました。M姉妹が書いたみことばをたくさんの人たちが読みましたが、おそらく、この奥様の書いたみことばを一番たくさん読んでいたのは、すでに救われていたご主人であるI兄弟だったのではないのでしょうか。奥様が自分の字でみことばを書いたということは、やはりみことばこそ、自分の望みであり、前向きに生活することができる原動力である、と体験的に知るようになったからでしょう。

ですから私たちは、人間を納得させようとする、そのような努力は全く必要ありません。どうしても出来ないからです。I兄弟のように、主の恵みによって、悩みながら喜ぶことができる人たちこそ、イエス様を紹介するために一番用いられるのではないかと思います。

一昨日でしたか、沖縄のH姉妹から電話がありました。H姉妹は六十五歳ですが、彼女の以前からの友だちは、二十六年前にご主人を亡くし、四人の子どもを一人で育てるようになりました。いろいろなことで悩みました。元気なとき、「自分の葬儀は必ず集会でやってもらいたい」と願っていましたが、最近末期の癌であることがわかり、昨夜召されました。日曜日に、K兄弟も見舞いに行って一緒に祈り、非常に恵まれた時が与えられたそうです。前夜祈祷式は今晚で、葬儀は明日だそうです。新聞にも出るようになるので、おそらく二、三百人が参列するのではないかということですから、おもにK兄の証しのために祈ってください。死を克服したイエス様を喜んで証しすることが出来るようにと。

「イエス様の死」こそが、聖書の中心テーマです。

宗教の教えの内容は、人間は何を信じるべきか、何をすべきかと、それだけなのです。その意味で、聖書は根本的に違います。人間はどうしようもない者です。全く役に立たない者です。神様のみことばに対して、「妨げ」や「つまづき」を与える者にすぎないのです。けれども、このどうしようもない人間が中心ではなく、「イエス様」です。イエス様の「身代わりの死」です。パウロはあるとき決心したのです。「私は十字架につけられたキリスト以外に何も宣べ伝えません」と。

イエス様はどうして死なれたのでしょうか。

聖書はいろいろなことを言っています。

へブル人への手紙 1章3節

御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。

と書かれています。

イエス様は、「罪のきよめを成し遂げるために」と。いろいろなことを宣べ伝えるためではありません。ある新しい教えを伝えるためでもありません。イエス様は、罪のきよめを成し遂げるために来られただけでなく、成し遂げてくださったのです。

またへブル書の中で、

へブル人への手紙 9章26節

もしそうでなかったら、世の初めから幾度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかしキリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。

イエス様が人間となって地上に来られた目的とは、罪の問題を解決するため、「罪を取り除くため」と。

バプテスマのヨハネは、イエス様を紹介したとき何と言ったかと言いますと、
ヨハネの福音書 1章29節

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」

また、イエス様は、確かに私たちの罪のために死に渡されたお方です。

よく知られているローマ書4章最後の25節。

ローマ人への手紙 4章25節

主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。

また、イエス様はなぜ死なれたかと言いますと、私たちに主なる「神の義」を与えるために、「私たちが義と認められるために」でした。

ローマ人への手紙 5章1節

ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。

イエス様はまた、「私たちが愛して、その血によって私たちが罪から解き放すために犠牲になられた」と、黙示録1章5節に書かれています。

ヨハネの黙示録 1章5節後半

イエス・キリストは私たちが愛して、その血によって私たちが罪から解き放ち、…

また、イエス様は、「私たちが今の悪の世界から救い出すために、代わりに死なれた」とガラテヤ書1章4節に書かれています。

ガラテヤ人への手紙 1章4節前半

キリストは、今の悪の世界から私たちが救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。

また、ペテロは、「私たちが神のみもとに導くために、イエス様は死なれた」と書いたのです。

ペテロの手紙・第一 3章18節

キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちが神のみもとに導くためでした。

とあります。

将来のことを、私たちは今知ることができます。聖書が語っているからです。

ヨハネの黙示録 5章12節

彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」

なぜ、このようにして「救われた喜び」の新しい賛美が歌い続けられるのでしょうか。主は、私たちのような者を愛し、私たちのために犠牲になられ、その血によって私たちを罪から解放してくださったからです。

人間の最大の問題は、みなさんご存じですが、罪の赦しの問題です。ですから一番大切な問題は、私たちの罪がもうすでに赦されているかどうか、ということです。

聖書を通して罪の赦しが提供されています。主なる神の救いのご計画は非常に大きく、且つ深いものでありますから、主なる神だけがそれを説き明かすことがおできになります。その主の救いのご計画を、例話などを使って人間が説き明かそうとしても、ごく一部しか明らかにできないほど深いものです。

また、旧約聖書の中に出てくる幕屋を通して、主は救いのご計画を見る材料として書き記してくださったのです。

今、I兄弟がお読みになりましたレビ記の中の一番大切な章とは、おそらく16章なのではないかと思えます。その16章の中で、一番大切な日について、いわゆる「贖罪の日」について書かれています。

この日を通して、イスラエルの人たちは最もよく救いの奥義を知ることができたのです。この日は、旧約聖書の最高の日を意味し、イスラエル人たちにとって最も意味の深い日でした。そして、すべてのイスラエル人にとってその日は聖なる日でした。こんにちでも、この日はイスラエルの最高の祝祭日とされ、新約聖書の光によって、私たちはその日の本当の意味を知ることができます。もし新約聖書の光によらなければ、本当の意味は分からず、そのままになってしまったことでしょう。「贖罪の日」という最も大切なこの日こそ、イスラエルの人たちにとって罪が赦され、贖われたかけがえのない日だったのです。その救いの日の実際の成就是、ゴルゴタの丘でイエス様が成し遂げてくださったのです。

この「贖罪の日」から、二つの出来事を取り出して、少し考えたいと思います。

- ・第一は、債務が支払われたということ。
- ・もう一つ、罪は赦されたということです。

今、I兄弟がお読みになりましたレビ記の16章をもう一度読んでみましょう。16章の15節から。

レビ記 16章15節から17節

「アロンは民のための罪のためのいけにえのやぎをほふり、その血を垂れ幕の内側に持ってはいり、あの雄牛の血にしたようにこの血にもして、それを『贖いのふた』の上と『贖いのふた』の前に振りかける。彼はイスラエル人の汚れと、そのそむき、す

なわちそのすべての罪のために、聖所の贖いをする。彼らの汚れの中に彼らとともにある会見の天幕にも、このようにしなければならない。彼が贖いをするために聖所には行って、再び出て来るまで、だれも会見の天幕の中にはいてはならない。彼は自分と、自分の家族、それにイスラエルの全集会のために贖いをする。」

とあります。

その当時、イスラエルの民は主の愛を忘れ、とんでもない罪を犯してしまったのです。この主なる神の前に犯した罪は債務となったのです。長い年月の間に、この債務は積み積もって莫大なものになりました。いわゆる「贖罪の日」とは、義なる、聖なる神の前を歩む日でした。

しかし主は、「罪を犯した者はすべて死ななければならない」とエゼキエル書18章4節に厳かに言明されました。ですからイスラエルの民の状態は、みな罪を神の前に犯したということで、死の判決を宣告されたのです。主は、ご自身の「神の義」を無にすることはおできになりませんでした。主は、「神の義」のために、罪を犯した者すべてを追放しなければならなかったのです。そのため、主は実際の死の判決を下さざるを得なかったのです。

けれども、実際にはイスラエルの民ではなく、代表者がさばかれました。すなわち代表者、代理者として「羊」を、はん祭としてささげることが行なわれました。この羊はイスラエルの民の身代わりとして犠牲となりました。羊を殺し、血を流すことによって犠牲のしるしを示されました。その羊の血を贖罪所の上と贖罪所の前に注がなければならなかったのです。

この贖罪所は神の箱のふたであり、箱の中には律法と戒めとが書き記された石の板があり、その箱のふたに、ほふられた羊の血が流されました。それはいったい何を意味しているのでしょうか。石の板の上には神のみこころが書き記されていました。それがいわゆる「モーセの十戒」と言われていたものです。すなわち、「あなたはわたしのほかには何をも神としてはならない。あなたは殺してはならない。あなたは盗んではならない。あなたは姦淫してはならない。あなたはむさぼってはならない」云々と。

イエス様はこれらの律法と戒めとを要約して、次のように言われました。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして主なるあなたの神を愛せよ」。ただ「信じなさい」ではありません。「心から愛せよ」と。

また、「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」と。このみことばは旧約聖書にあるみことばだったので、ユダヤ人はみなよく知っていました。けれど、彼らはみなこの掟を、この戒めを破ってしまったことを認めざるを得なかったのです。さらに、主の掟を破る者は死ななければならない、ということもよく知っていました。

ですから、彼らは罪を犯し、「義なる聖なる神」の律法を破ったため、死ななければならないということをも知っていたのです。しかし今や、ほふられた羊の血が流されたことによって、イスラエルの民の身代わりとして、その血が民の罪を負ったのです。

では、どのようにしてその血が債務を負うことができるのでしょうか。

それは、主ご自身が、その血の意味が何であったかを答えておられます。同じくレビ記の次の章です。17章11節をお読みいたします。

レビ記 17章11節

なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。いのちとして贖いをするのは血である。

「いのちは血の中にある」。主なる神は、「血の中にいのちがある」とはっきり記しておられます。血はいのちです。血が流されるといのちがささげられます。

ですから、流された血は、いのちがささげられたことのしるしです。血は債務が支払われたことを意味します。また、血の犠牲は債務が支払われたことの証明です。借金を返済すると借用証書を破り、領収書が与えられるように、血の犠牲によって債務が支払われたのです。

イスラエルの民によって破られた律法が入っている神の箱の上に、血が流されることによって、債務は支払われたのです。主がご覧になると、贖罪所には血が流され、その血は神の律法の上をおおっていたのです。血は、罰が下され、いのちがささげられ、債務が支払われたことを意味しているのです。

イスラエルの民が律法を持っていたのと同じように、私たちは聖書を持っています。聖書は、「あなたは死に定められている。しかし、あなたの身代わりとしてほかの人がすでに殺された。あなたの債務は支払われた。あなたは今や恐れることなく、主のみそばに近づくことができる」とはっきり記しています。何という力強い、素晴らしい主なる神の知恵と英知でしょうか。

すでに旧約聖書の中で明らかにされた主の救いのご計画は、何と素晴らしいものでしょうか。三千年前に旧約時代のダビデ王はこの救いに与かるようになり、次のように証したのです。よく知られている詩篇32篇を読んでみましょう。本当に素晴らしい、心からの賛美、また告白です。1節から。

詩篇 32篇1節から5節

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。

旧約聖書の「贖罪の日」は、今話しましたように債務が支払われたのです。けれども、それだけではなく、罪も赦されたのです。

債務が支払われたとき、罪も赦されます。先ほど話しましたように、領収書もらった者は借用証書を破り捨てることができます。それは「贖罪の日」における二番目の大きな事実です。債務が支払われたゆえに、その結果として罪が赦されたのです。債務が支払われ、消されたとき、初めて罪が赦されたのです。

罪は確かに恐ろしい現実です。罪は一つのことを通してのみ解決されるのです。すなわち、流された血の犠牲によってのみ解決されます。血が贖うゆえに罪が赦されたのです。

もう一度レビ記の16章に戻りましょう。20節からお読みいたします。

レビ記 16章20節から22節

彼は聖所と会見の天幕と祭壇との贖いをし終え、先の生きているやぎをささげる。アロンは生きているやぎの頭に両手を置き、イスラエル人のすべての咎と、すべてのそむきを、どんな罪であっても、これを全部その上に告白し、これらをそのやぎの頭の上に置き、係りの者の手でこれを荒野に放つ。そのやぎは、彼らのすべての咎をその上に負って、不毛の地へ行く。彼はそのやぎを荒野に放つ。

この贖いの二番目の事実、「荒野に送られたやぎ」を通して、明らかにされたのです。このやぎは、罪の赦しとはいかなるものであるかを説き明かすためのしるしでした。そして、第一のやぎがほふられ、その血が贖罪所の上と前に注がれたとき、第二の生きているやぎを引いて来て、人々の前に立たせることになっていました。そのとき、アロンはその生きているやぎの頭に両手を置きました。つまり、そのことによってイスラエルの人たちの諸々の罪を告白して、これをやぎの頭に乘せたのです。聖書の中で、ある人は他の者の頭に両手を置くときは、二人の者は一つになることを意味していました。従って、大祭司であるアロンがやぎの頭に両手を置くことは、イスラエルの民の罪がやぎの上に置かれ、やぎに移されたことを意味していました。

それは一つの象徴でありましたが、やぎの頭に乘せられた重荷は何という大きなものだったのでしょうか。しかも、それは一年間のイスラエルの民全体の罪の重荷でした。一人の人間が一年間に犯した罪の重荷を考えてみてください。その罪の重荷は何と重苦しくのしかかっているのでしょうか。自分の罪の重荷に本当に悩んだ人は何人いるのでしょうか。

ダビデは自分の罪について、今読みましたように告白したのです。

詩篇32篇 3節、4節

私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。

「黙っていたとき」というのは、罪を上手く隠そうと思ったときです。

ダビデは考えられないほど悩みました。欲しいものは全部持っていたのです。けれど、彼にとって必要であったのは「罪の赦し」でした。赦されたと分からなかったので、昼も夜も眠れなくなったし、おそらく沢山のご馳走を出されても、「嫌です」という者になったのではないのでしょうか。

この32篇だけではなく、51篇も彼の経験についての告白です。

詩篇 51篇1節から14節

神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私のそむきの罪をぬぐい去ってください。どうか私の咎を、私から全く洗い去り、私の罪から、私をきよめてください。まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告される時、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。それゆえ、私の心の奥に知恵を教えてください。ヒソプをもって私の罪を除いてきよめてください。そうすれば、私はきよくなりましょう。私を洗ってください。そうすれば、私は雪よりも白くなりましょう。私に、楽しみと喜びを、聞かせてください。そうすれば、あなたがお砕きになった骨が、喜ぶことでしょう。御顔を私の罪から隠し、私の咎をことごとく、ぬぐい去ってください。神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。私をあなたの御前から、投げ捨てず、あなたの聖霊を、私から取り去らないでください。あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。私は、そむく者たちに、あなたの道を教えましょう。そうすれば、罪人は、あなたのもとに帰りましょう。神よ。私の救いの神よ。血の罪から私を救い出してください。そうすれば、私の舌は、あなたの義を、高らかに歌うでしょう。

「あなたの救いの喜びを、私に返し」と。(喜びを失くしたらしいですね。)

19節

そのとき、あなたは、全焼のいけにえと全焼のささげ物との、義のいけにえを喜ばれるでしょう。そのとき、彼らは、雄の子牛をあなたの祭壇にささげましょう。

罪の重荷が、ただ一人だけの分でもそんなに重いものですから、ましてや民全体の罪の重荷はいかばかりでしょうか。しかもそれはすべての明らかにされた罪のみならず、知られていない罪をも含んでいるのです。すべての罪や、考え、行ない、あるいは言葉による罪をすべて指しているのです。

このやぎは非常に重い罪の重荷を背負い担っていたのです。イスラエルの民は、すべての罪がやぎの上に置かれ、荒野に送り出され、やぎを連れなくて帰って来る人を見たのですが、そのやぎを二度と見た者はありませんでした。ほかの動物だったら、猫だったら、

犬だったら、必ず帰ります。やぎと羊は無理です。それは方向感覚が全くないからです。

このようにして、イスラエルの民の罪は消されました。罪はやぎによって運ばれたがゆえに、もはや見ることも見いだすこともできませんでした。そのようにして、主なる神は、イスラエルの民に罪が赦されたことを明らかにお示しになったのです。

もちろん旧約聖書における大いなる「贖罪の日」は、一つの象徴にすぎません。実際の大いなる「贖罪の日」は、主イエス様が十字架につけられたときに始まったのです。

もう一度へブル書を開いてみましょう。9章11節から14節までお読みいたします。
へブル人への手紙 9章11節から14節

しかしキリストは、すでに成就したすばらしい事がらの大祭司として来られ、手で造った物でない、言い替えば、この造られた物とは違った、さらに偉大な、さらに完全な幕屋を通り、また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所にはいり、永遠の贖いを成し遂げられたのです。もし、やぎと雄牛の血、また雌牛の灰を汚れた人々に注ぎかけると、それが聖めの働きをして肉体をきよいものにするすれば、まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とするものでしょう。

22節

それで、律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、と言ってよいでしょう。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。

27節、28節

そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。

どのようにして「贖罪の日」に、第一のやぎによって債務が支払われ、第二のやぎによって罪が荒野に運ばれ赦されたかを見てまいりましたが、それと同じように、主イエス様の血によって、その二つのことが成就されたのです。すなわち、全人類の債務が支払われ、罪が赦されたのです。

もちろん実際には、やぎの血によって全ての債務が支払われたのではないことが明らかです。聖書全体は、旧約聖書における犠牲のはん祭がすべて、イエス様による罪の贖いと赦しとを指し示しているとはっきり記しているのです。

主イエス様は、この地上に来られる前から尊い聖なる血を流すことによって全人類の債務を支払い、罪を赦す備えをしておられました。けれどイエス様は、私たちの身代わりになられるため、私たちに似た者、すなわち人間の形をとってこの地上に来られたのです。ただ人間だけが、人間の身代わりとなることができるのです。つまり、イエス様は私たちの身代わりとなるために、人間の形をおとりになられたのです。イエス様は何と謙遜に、低くなられたことでしょうか。

最後にもう一箇所読んで終わります。ピリピ人への手紙の2章7節と8節です。

ピリピ人への手紙 2章7節、8節

ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

このことを考えると、本当に心から礼拝せざるを得ないのではないのでしょうか。

了